

(翻訳資料)

王諾「生態文学概論」(上)

甲 斐 勝 二*
 徐 達 然**

訳出にあたって一前書き

(一)

ここに訳出して掲載するのは、廈門大学人文学院中文系の王諾教授の論文で、王諾教授の著書である『欧米生態文学』（北京大学出版社 2003 年 8 月第 1 版 2011 年 6 月第 2 版）の第 1 章「生態文学概論」の部分である。この書は、欧米の生態文学批評を体系的に中国に紹介した初めてのもので、生態文学の中国における現在の勃興の起点であり一里塚であると思なされている¹。生態批評 (ecocriticism) や生態文学 (ecological literature) の語を使ったこの分野の研究は 2003 年前後に中国に紹介され始め、その後急速に行われ始めた。今では生態批評の中国学派も形成されているといわれ²、文学作品分類でも後ほど触れるように一領域を占めるようになっている。

「生態文学」とは、日本ではしばしば環境文学と訳されるものだが、ここでは作者の意図を汲み「生態文学」と訳している。その理由は後述する。お気づきのように「生態」とは「ecology」の訳語で、「生態文学」は日本ではさしずめ「エコ文学」というところなのだろう。この論文は、その後人民出版社から 2012 年 5 月に出版された『生態文学』（劉青漢主編）の第一章にそのまま再掲され、『生態文学』第二章以下に続く各論をまとめる概論の位置づけが与えられている³。従って、この概論は、上述の通り欧米の生態

* 福岡大学人文学部教授

** 福岡大学工学研究科資源循環環境工学専攻修士課程一年

¹ 苗福光『文学生態学：危機に瀕した星のために』復旦大学出版社 2015, 53 頁。² 同上 51-52 頁。³ 『生態文学』の全十七章の第二章以下の題名は次の通り：第二章「生態文学における文化資源」・第三章「米国生態文学と生態批評（一）」・第四章「米国生態文学と生態批

文学を考える中国の研究者による概論でもありながら、中国の読者に生態文学を語る『生態文学』の書全体の概論として見なし得るものでもあり、中国における生態文学への理解を語るものとしてよい参考資料となると考えている。生態文学という視点の起源が欧米、特に米国にあって、中国ではまだ始められて十数年の状態あることを考えれば、まずは既に進んだ情況が紹介されて、その後その理論を消化吸収してその地域の伝統思想をふまえて発展するという真っ当な流れの中でこの研究は進んでいることになる。上海文芸出版社から2001年から2010年までの小説を対象に分野別9巻にまとめて出版された『新世紀小説大系』（2014年1月）の3巻目には、『生態巻』が設けられ、そこには十六篇の作品が収められている。既に作品制作でも一領域を持つほどの状況であることが推察される。『新世紀小説大系』の編者王光月氏が記す生態文学の特徴は、王諾氏が訳出した論中でまとめている定義とほぼ一致するので、王諾氏の視点は継承されていると考えて良い。王光月氏は、欧米から輸入した生態意識が未だに中国の社会現実態に沿ったものになっておらず、そのため作品の中には観念化が見られ、今後は想像力の拡大が望まれるという。⁴ 中国文学批評史の視点から見れば、この欧米から輸入された生態文学研究が、今後中国の社会現実や伝統思想との関係に沿ってどのように中国に独特の生態文学や文学批評を生み出していくのかがおもしろいところだ。既に形成されているという「生態批評の中国学派」を背景にした今後の展開に興味が湧く。日本では現在中国現代文学におけるこのような動向はあまり注目されているようには見えないが、中国の環境問題の深刻さから考えると、今後中国文学研究のテーマの一つにもなり得る領域だろう。王諾氏のこの文章はその初期の情況を語る文章として位置づけられ、その訳出の価値があるはずだ。

以上訳文掲載のためにいささか大義名分を語る話になったが、正直に言えば、人文学部に属し中国文学や中国語研究に携わる教員が、兼任する大学院工学研究科（資源循環

評（二）・第五章「中国現代文学中の反生態文学の検討」・第六章「中国生態文学と生態批評（一）」・第七章「中国生態文学と生態批評（二）」・第八章「中国生態文学と生態批評（三）」・第九章「中国生態文学と生態批評（四）」・第十章「ロシア生態文学」・第十一章「イギリスの生態文学」・第十二章「アフリカの生態文学」・第十三章「フランスの生態文学」・第十四章「ポーランド・イタリアの生態文学」・第十五章「カナダの生態文学」・十六章「日本の生態文学」・第十七章「生態文学テキストの拡大」。各章担当者を設けての執筆である。

⁴ 『新世紀小説大系・生態巻』（2014年1月上海文芸出版社、王光月編選）王光月「新世紀以来の“生態小説”」参照

環境工学・東アジア文化環境専修)の教員として、そこに学ぶ大学院生との基礎研究の一つであることは白状しておかねばならない。「環境」研究の文理融合工学系大学院に属す文系志望の二人がその研究対象を相談した折、現在中国で社会問題にもなっている環境汚染に対して、ともすれば理系技術での対応と修復が語られがちな現在、中国の文学側からの対応がどのようなものか、文献を読みながら考えて見ようと始めたものだったが、中国でのこの領域へ向けられた日本側の関心はまだ薄いようで、類似の資料はまだないように見えた。それならばこの訳読作業の成果を紹介し、関係者の考察のための資料を提示し、かかる領域の存在を紹介しよう、というのがそもそもの狙いである。二人ともこの領域はまだ駆け出しの素人であるので、訳読や的確ではない訳語も多いだろうが、現在中国で始めて間もない生態文学という領域がどのようなものであるのかについて知っていただくだけでも、訳出の価値はあると考えている⁵。

著者の王諾教授は1958年に生まれ、吉林省長春の人で、この領域では多く論著があり、中国を代表する生態文学研究者なので、その主張の影響もかなり大きなものがあると予想される。但し紙幅の関係で、今回は全四節中の第一節・第二節に留め上編とし、第三節及び第四節は下篇として次回に譲ることにした。王諾教授には訳出の申し出をしたおり、すぐさま快諾の返事をいただいた。御礼を申し上げます。

(二)

訳語について触れておきたい。「生態文学」や「環境文学」という文学領域は、産業革命以来の工業発達による環境汚染及び地球規模の環境破壊に導かれて20世紀後半に現れたもので、研究領域として古い伝統があるわけではない。裏を返せば、それだけこの半世紀の環境破壊がすさまじく、それが数千年続いてきた人間の基本的な生活意識の改変まで迫る状況になっていることも物語る。

日本におけるこの領域の専門学会、文学・環境学会のホームページでは、その用語説明集に「エコクリティシズム/環境批評 [ecocriticism / environmental criticism]」があ

⁵ 日本のエコクリティシズム関連の書籍では、管見の及ぶところその対象は日本の作品以外はほとんど欧米の作品が対象になっている。これは、この研究領域が欧米で盛んになり日本に招来されたものだからであること、中国の状況と同様だからであろう。また、周囲を見る限り日本の中国現代文学の研究者の間でもまだあまり話題にのぼらない領域のようである。

(3)

り、二つの批評を同じ領域として包含するようにその文学批評の誕生と流れが書かれている。それによれば、まず生態に対する危機意識からエコクリティシズム (ecocriticism) が生まれ、その後環境批評 (environmental criticism) に広がっていったのだが、現在でも「エコクリティシズム」の語がこのような批評ジャンルを包括するという言葉となっている、のだそうである⁶。

一方、この王論文の一つの特徴は、「環境」(environment) と「生態」(ecology) の区別を明快に立て、その思想的な拠り所の違いを強調し、「生態文学」が「環境文学」の側に立つものではないことを強く主張するところにある。管見の及ぶところ、日本の研究ではこの二種を峻別して考えようとする状況ではなさそうで、この二種は先に挙げた用語解説に述べるように「環境批評」とか「エコクリティシズム」の語の下に一括して扱われているように見える。従って、この訳文では著者の主張が明確に示されるようにと、原文の「生態文学」の語をそのまま使うことにした。この語を見た方は「ギョッ！」とされるかも知れないが、お許しを願いたい。

念のため、王諾教授のこの二種の区別について説明しておけば、王教授は「環境文学」を人間中心主義として自然環境を人間の外部におき自然環境を人間が搾取する対象として捉える思想の上に立つ文学として扱い、自然破壊を促してきた従来人間中心発展思想と本来根幹を同じくするものと考えている。それに対抗するものとして示されるのが「生態文学」で、その内容は人間中心主義から環境全体が造り出す生態系の維持という視点に思想の根幹を移し、人間も自然環境の一部として生態系全体の平衡の重要性を訴える思想の上に立つものである。これは所謂「ディープエコロジー」の系統の文学ということになるのだろう。もちろん、具体的な作品の検討では作品自体に領域など簡単に決めることはできないので、環境文学が扱う作品も同様に扱うことにもなるのだが、その扱い方には思想的に本質的な違いがあると言うわけである。王諾教授がこのように本質的な違いを「環境文学」と「生態文学」の間に読み取り、「生態文学」の語を使ってその領域を語ろうとする以上、「生態文学」としてそのまま訳すことにしたのである。同じ漢字を使う日本人には、なじみのない言葉として違和感をおぼえる方もいるかも知れないが、考えてみれば「エコロジー」から派生させて「エコ～」とあれこれ造語する日本語のやり方と、エコロジーを生態と訳した以上「生態～」の形で言葉を作るやり方と

⁶ 参照 ASLE-Japan/文学・環境学会 HP 環境文学用語集「エコクリティシズム・環境批評」項。なお、訳出においてはこのHPの掲載資料を参考にさせていただいた。

は、その言語文化の性格の違いに基づく所でもあり、訳文としてどうか御寛恕願いたい。なお「生態」の語については中国には古くからあったとはいえそれはここで用いる意味ではない。エコロジーの訳語として使ったのは新しい用法である⁷。

以上が生態の語を訳文に使用した理由である。蛇足ながら、王諾氏は、自然環境の悪化に対する生態の保全と人間の生存に向けて文学者が取り得る一つの行動として訴えていることにも触れておきたい。これは生態文学を求める人であれば必ずや持つ主張でもあろうが、中国古典文学批評の研究領域に関わって来た訳者の目から見れば、古来『詩経』解釈に見られたように詩文制作による社会参加を強く訴えてきた中国知識人に伝統的な流れを継承するにも思われ、日本との違いを見るような気もしている。或いはそれほど中国の環境問題はひどくなっているということだろうか。

訳語に関係してもう一つ説明が必要なのが、原文で「生態整体主義」などの語で出てくる「整体」の語である。中国語で「整体」といえば、「全体・全体・まるまるそのまま」の意味で、「集団や事物・事柄の全体（整った全体）」を意味し、「生態整体」の語は「生態全体のありよう」を意味するものとなる。ところがこの「整体」の語は日本語では医療に関わる「整体」（体を整える）の意味で使うことが多い。そこで「整体」は概ね「全体」で訳すことにした。場合によっては「生態全体主義」の語が現れて、ファシズムに通じる「全体主義」の語が持つ強制的で暗いイメージも浮かんでくようが、決してそのような主張ではなく、倫理学にいう、ホーリズム (holism) 的なものだと考えてほしい。

最後に著者の文体の特徴を指摘しておきたい。それは類似の内容を二つ列べる対句表現の修辞法の類見である。中国の文章では古来対句を多量に使ったものがしばしば書かれてきた。これには“対”による美的な効果の他に説得性を増す効果があって、時には鼎対といって三句ならべるときもあった。これをそのまま日本語に訳すと、もたもたした感じになるのだが、表現の通りそのまま訳している。その分同類の内容をくりかえし読まされるような気がしていささか読みづらくなっているかもしれない。

注釈については、原注は原注と明示して欧文はそのまま記している。中国語による注釈に出てくる書名・人名などの漢字は日本の漢字を用いた。日本人の読者にはそのほう

⁷ 『漢語外来詞詞典』(上海辞書出版社1984)では、中国語の「生態学」は日本で英語のエコロジーを訳した「生態学」が源だと考えている。現在の「生態」の意味もこれに基づくものと思われる。

が分かり易いと思ったからである。中国の書名は通常《 》を使って示すので、訳文ではこれはそのまま使っている。日本で翻訳が出ている書籍は、我々が見つけたものは記しておいたがそちらの訳文で参考ができたものは少なかった。また、原注と書いていないものは訳注である。区別せねばならないところは訳注と記したが、その他の部分は記していない。訳注も、必要と思われる部分の注釈に留めている。外国人の名前については、日本での通用の名称が分かればそれを使ったが、こちらの勉強不足で奇妙なものになっているかも知れない。このほかに、当然ながら、まだまだ誤訳や訳語として不十分な言葉も多いことは承知だが、この領域の現在の状況の紹介することが目的なのでお許しを願いたい。なお、本学人文学部英語学科の大島由起子先生がこの領域の研究もされているので、一度目を通していただき有益なご意見をいただいた。衷心より感謝します。それでもつたない訳文でひたすら恥じるばかり、御指正をお待ちします。(文責・甲斐)

王諾「生態文学概論」

第一節 生態文学誕生の原因

生態文学の誕生と発展は、20世紀60年代以来ますます激しくなった生態系の危機をその主な原因とする。生態文学が立ち上げられて次第に盛んになった現象は、人類が生態の災害を軽減し、また防止すべきだという緊迫した必要性が文学の領域で必然的に現れ、また文学者の地球及び全ての地球生命の運命に対する深い憂慮がその創作において必然的に反映されたものでもある。外在の圧力、時には外在の脅迫とさえもいえるものは、文学者の生態への責任感、自然への思いやり及び人類の終極への心配と結びつき、生態文学に強い生命力を注ぎ込んでいる。

世界的な生態の危機は、生態文学の発生を促したばかりでなく、しかも、人文科学と社会科学領域にまでその波が及ぶ生態重視思潮の発生を促した。日増しに波が高くなり大きくなる生態重視思潮の中で、生態文学は極めて重要な支流の一つである。生態文学者は生態重視思潮の初期段階でその潮流を導く重大な作用を発揮した。それは生態思想の核心的な精神を唱道したことだ。生態主義の人物としてはアルド・レオポルド、世界に生態思潮を巻き起こした創始者としては、環境文学のレイチェル・カーソンがそれである。

生態文学の特徴や・成果・意義及び価値を理解するためには、まずそれが生まれた主要な原因、つまり生態危機を理解しなければならない。人々を不安にし、人々を震えさせ恐怖さえ起こさしめた生態危機の真相を正視しよう。

1. 主要な原因 外部からの理由

現在、人類が直面する最も重大で最も緊迫している生態危機はエネルギーと気候の危機である。大量の事実とデータによって、気候の変化は明々白々に起こっており、しかも加速中であって、すでに巨大な被害をもたらしているばかりでなく、壊滅的な災害をもたらすことが証明されている。気候変化を造り出した元凶は人類である。つまり人類が度を過ぎて化石燃料を使い、温室性の気体を排出しすぎたのだ。この結論は、“大量の世界の先端科学研究からもたらされ、精密な検討を経たもので、さらに厳密な証明論文もあって、現在研究された最も大きく最も長く、最も費用が必要で、最も国際的で、学問の関連性も最大で最も徹底した科学的議題である”⁸。気候の変化の巨大な危険性は、気温の上昇、温暖化に留らず、それに伴う降雨量、湿度、土壌の温度、大気の環流などの変化、乾燥化や砂漠化の加速、洪水や暴風雨雪など極端に異常な天候の頻繁な発生、氷河や南北極を覆う氷の融解、海洋の環流体系の攪乱、それによって導かれる可能性がある北半球の氷河期、生物の繁殖モデルの混乱や生物種の絶滅、海面上昇等々である。海面の上昇は現在人類が直面する最も恐ろしい生態への警告である。ハーバード大学のウッドホール実験室のヨハン・ホートルン教授等の環境科学者は以下のような警告を発している。気候変化にたいして人類が積極的に対応できる時間は極めて短い。10年前に最も悲観的な予測は2040年に北極の水が全て溶けるというものだったが、2008年の科学者の予測では2012年頃には悲劇が発生すると予測している。つまり、海面が1メートル～3メートル上昇し場合によっては6メートル上昇するという警告だ。もしこのような悲劇が本当に発生したとすると、人類の文明の全体的な枠組みに天地が逆転するほどの変化が起こる。最も繁栄している経済の中心（ニューヨーク・ボストン・ロスアンゼルス・マイアミ・リオデジャネイロ・プエノスアイレス・東京・大阪・釜山・シンガポール・ムンバイ・コペンハーゲン・ヘルシンキ・オスロ・セントペテルブルグ・マ

⁸ 原注：[米]トマス・フリードマン《世界又熱又平又擠》王璋沁等訳 何帆校 湖南科学技術出版社2009版、第120頁。邦訳は日本経済新聞社から出版（トーマス・フリードマン『フラット化する世界』）、訳文は未確認。

ルセイユ・シドニー・メルボルン及び上海・天津・秦皇島・大連・青島・寧波・厦門・香港・台北・高雄等)の大部分が大きな損害を受けるか或いは水没してしまい、10億単位の生態難民がその生活の場所を失なって、全人類の生活水準は半世紀以上も前に戻ってしまうだろう。これは決して大げさな話ではない。極めて多くの厳格な科学者がみなこの結論を認めているのである。

たとえ海面の上昇がすぐには来ないとしても、地球資源は人類のこのような巨大な需要を満足させることは困難だ。この地球では必要とされる資源が正に日増しに枯渇を続け、有限の資源と無限の要求の間の際だった矛盾が人類の目の前に既に明快に現れている。早くも1972年には、メドウズら17名の先進国及び発展途上国から集まった一流の科学者が世界を揺り動かした報告—『成長の限界』において、人類の工業を支えている主要な資源—石油・石炭及び各種不可欠な鉱物資源の埋蔵量は急激に減っており、多くのものは100年以内に全て採掘し尽くされるであろうとの指摘がなされている。世界資源研究所及び国際環境と発展研究所が主編となる『世界資源1988-1989』では、当時のエネルギー消費率に基づけば、全地球で現在分かっている石油の埋蔵量ではわずかに32.5年しかもたず、天然ガスは58.7年しかもたず、石炭も226年しか維持できない。有名な「ディリー統計」では、世界上必要不可欠で再生不可能な資源をまるまる集めても、現在の米国人なみの生活水準を享受させ、現在の米国人なみの要求に満足させられるのは、現在の世界人口の18%だけであると明示している。もしこの統計に誤りがなく概ね現実に符合するものだとすれば、これは、少なくとも全ての必要品の代換え資源が発明されなかったら、人類がこのような盲目的な発展を続けると、あっという間に全ての資源を使い果たし、“極貧”の状況に陥ってしまうことを意味している。つまり豪邸や自家用車及び現代的な生活の資材を手に入れた後に、突然これらの一切は全て再生不可能な資源の枯渇によって、利用もできなければ役にも立たないことを知るのである。

中国の一人平均の再生不可能な資源の所有量は世界の一人平均量に遠く及ばず、多くは世界平均の半分にも満たない。この30年間の高速な経済発展で、すでに多数の再生不可能な資源は枯渇の状況に瀕している。国家環境保全総局副局長の王玉慶は2004年に、中国の資源と環境の負担力はすでに極限に近づいていると指摘している⁹。同一年、

⁹ 2004年11月15日全国環境科学技術工作会議（中国語：全国环境科技工作会议）での指摘。

別の副局長の潘岳は、もし現在の高度の消耗、高度の汚染という拡大方法を改めなければ、中国は今後の発展を支えてゆく十分な資源と環境負担能力がなくなってしまうと警告している¹⁰。『成長の限界』では曾て一つの公式を提示したことがある。それは、資源総量÷消耗速度＝世界の末日。もし再生不可能な資源を使い尽くすことが人類文明の終焉を意味するのであれば、一人あたりの再生不可能な資源の所有平均が世界平均の半分にも満たないのに、単位生産値の資源消耗率が世界平均の3倍の中国は、全人類の6倍を超える速度で末日に向かって突進していることになる。従って、潘岳は何度も国民に警告している、中国が直面している環境危機はもはや未来の危機ではない、現実の危機なのだ、環境問題はもはや子孫や後世に幸せをもたらすための問題ではなく、我々現代人が安心して暮らせるかどうかという問題となっているのだと。

中国は地球で砂漠化した土地の面積が最も大きく、分布が最も広く、拡大が最も早く、危害も最も大きな国家である。砂漠化した土地は国土の3分の1にまで達し、水土の流出の重大な場所は国土の面積の38.2%を占める。中国には960万km²の土地があっても300万km²しか居住できる土地がない(国土の30%にも満たない)のだが、これは厳しい環境汚染のことは考慮していないし、ましてや海面の上昇によって、人口が最も密集し現代化の前線にある中国経済の動脈とも呼べる沿海地区が侵蝕されることも考えてはいない。20世紀50年代に比べて中国の人口は倍に増え、水土の流出と砂漠化した土地は約一倍半増えたことが意味するのは、半世紀の時間の中で、我が国の一人平均の生存空間が本来の5分の1に縮小されてしまっていることだ。中国の水資源の一人平均は2200m³で、世界の平均の5分の1である。米国の6分の1、インドの8分の1、カナダの60分の1で、世界では122位、世界13カ国の水不足国に列べられる。北京市民の平均水資源所有量は300m³に達せず、これは中国一人平均の8分の1で、世界では25分の1、水不足の程度は砂漠地帯のイスラエルと類似する¹¹。

中華民族の母なる黄河は1972年から川が海にとどかなくなる断流が起り始めた。70年代の断流の最長記録は21日で、80年代は36日、1992年は82日、1995年は118日、1996年は133日、1997年は300日、1998年は黄河が全く海に流れ込まない日の記

¹⁰ 2004年1月潘岳の《持続可能的な発展と文明転換》(中国語: <可持續發展和文明轉型>)での指摘。

¹¹ 中国水利省《第一回全国水力調査官報》p.8(水利部《第一次全国水利普查公報》2013)

録が330日に達した。ある専門家の予測によると、現在の情況からして2020年には、黄河の下流は一年中断流が起り、黄河が内陸河川になってしまうことは間違いないという。長江の源流も現在また次第に枯渇してきており、沱沱河、通天河¹²流域の乾燥化、砂漠化の問題は日増しに厳しさを増し、長江源流地区の砂漠化面積の増加も早くなっている。長江源流の最初の県である曲麻萊県の首府は砂嵐に包囲され、1980年緑や水の豊かな場所に引越さざるを得なかったが、わずか20年で砂嵐は曲麻萊県の新たな県城を脅かし、都市中の井戸が涸れてしまった。2004年の「長江を守る万里の行進」の活動¹³の中で、多くの専門家が考察の後に直言するのは、長江の水系はすでにかんりの危機に陥っており、もし救済が間に合わねば、10年以内に、長江の水系の生態は崩壊寸前の情況になるだろうという。しかしながら、長江流域を含む西南の大河の本流及び支流域においては、現在建設中または計画のある水力発電所は三峡行程の8つ分の設備規模に近づくありさまである。国家發展改革委員会は2010年以前に西南地区の河川の開發強度は25%を超えてはならないと要求したが、これは国際的に行われている要求よりもかなり寛大であった。しかし、巨大な電力会社はこの要求を無視し、開發の強度は80%を越えるほどに達している¹⁴。一つまた一つと水を溜める堰が至るところにできて、岷江¹⁵だけでも水力発電所は60以上になってしまったのだ。西南地区の河川支流は基本的にすでに涸れ、本流の水位は下がり、流速も落ちてきている。一滴の水も残さずに行う壊滅的な開發は、もう一つの淮河やもう一つの黄河の悲劇を正に今造り出そうとしている（淮河の流域の中心河川及び支流は8300以上のダムがあり、5000あまりの水門があって、淮河はすでに完全にズタズタにされてしまった）。

中国の汚水排出の総量は極めて大きく、90%以上の都市の水質環境が悪化している。中国行程院の報告書によれば、中国の西北では水質環境が強度に及び重度に汚染されて

¹² この二つの河は長江上流、チベットを流れる河川に当たる

¹³ 「長江を守る万里の行進」の活動：2004年10月12日から22日の間、全国政協人口資源委員会と中国發展研究院との共同で行われた活動。長江の水環境をさらに進んで保護し、長江流域の人と自然を全面的に持続可能な發展にするために調査をして提言するもの。四川省宜宾から長江に沿って上海にまで至った。主に考察したのは関係地区での生態保護、農地から林への復元、水質汚染、三峡ダム建設による環境保護、長江の水質などの面であった。

¹⁴ 地質専門家楊勇が南方週末新聞社「西南水利發電大躍進『八つの三峡の建設計画』』というニュースでこの指摘をしている（中国語：地質学家楊勇在 南方周末报：《西南水电大跃进“八个三峡筹划开建”》）。

¹⁵ 岷江：四川省を流れる長江の支流。

いる地区の人口数はすでに総人口の79.1%を占めている。水利部の調査結果によれば、中国の700本の総長10万Kmの河川で、飲用水の標準¹⁶〔国家基準の一類・二類〕に適合する部分は32.2%を占めるに過ぎず、汚染されて飲用不可能な部分はすでに67.8%を占めている。2005年1月の監督検査では、長江・黄河・淮河などの七大河川で、五類に達しない水質が28.4%、五類の水が8.7%、四類の水が16.2%、三類の水が20%を占め、飲用に適さない水が合計73.3%を占めることが明らかになった。黄河は上流のわずかな部分の水質が三類で、その他の水質は通常四類から五類である。基準ではすでに完全に使い物にならないとはいえ、今でも依然として沿岸の50あまりの大中の都市及び420の県城への送水を担っている。長江本流に沿った21の大中の都市は、毎年長江に向けて63億トンの廃水や汚水を流し込むので、国家環境保全総局は、長江の本流は全体的にみな汚染されていて、三・四・五類の水がすでに61.2%を占めると公言されている。それぞれの毒の河、汚れた河、臭い河がまとめて海に流れ込むので、中国の全ての近海海域は重大な汚染を受けている。中国国家の基準では、三類の海水が最も汚いのだが¹⁷、中国近海の海水の品質は絶対多数が三類か三類どころではない。養殖による絶対多数の海産物はこのような海水で生産されるものなのだ。最も被害が大きいのは渤海で、専門家は、10年もしないうちに渤海は地球上の第二の死海となるだろう、その時にはもし渤海に汚水が一滴も流れ込まなくても、海水が元の生態に戻るまで少なくとも200年はかかり、沈殿した汚物は数百年留まり続けるだろうと警告する¹⁸。

大量の農薬や化学肥料の使用及び長期にわたる汚染水による灌漑は、農業畜産業漁業

¹⁶ 中国の水質基準は五類に別れ、一類は水源地レベルで自然保護区にあたり、二類は同様に水源地レベルで稀少水生動物の生存や稚魚の産卵場となり得る場所、三類は水生動物が生存し人間が游泳できる程度のレベルで、国の基準では三類までは飲用が可能とされる。四類は工業用水、五類は農業用水のレベル。五類を超えると使用不能となる。王諾氏はここでは三類は飲料には適さないものと見ているようである。確かに日本では魚が泳ぐ河川の水がそのまま飲用水にできるとは限らない。

¹⁷ 現在では四類に分けている。一類は海洋漁業区域で稀少海洋生物が生存できるところ、二類が水産養殖ができ海水浴ができるところ、第三類が工業用水に使えるレベル、第四類が港や海洋開発地区のレベルとなっている。以前の三類の中の港湾のレベルをその下の四類に下げている。

¹⁸ 2006年10月18日中国ニュースネット「渤海における汚染が最も厳しい、専門家が十年後死海となるだろうと警告」(中国新闻网、2006年10月18日《渤海汚染最严重、专家警告称十年后将成“死海”》)

の生産品に大変な汚染と農業生態環境の極めて大きな破壊を与え、農作物・畜産物・及び水産物の残留有害物は極めて高い。中国環境発展国際合作委員会¹⁹は2004年の総会で以下のように述べている。中国の農民の化学肥料と農薬の濫用はすでに人体の健康と環境内実に重大な危害を与えており、化学肥料と農薬の過度の使用はすでに極限に達している。野菜への肥料及び農薬の与え過ぎが中でも重大で、農薬の残留量が基準を何倍も超えるだけでなく、広範囲で重大な土地汚染を造り出し、億単位の住民の健康が被害に晒されている。国際食品規格委員会では176種類の農薬の残留について、2439条の制限量の基準が決められているが、中国の標準はこれに比べてその隔たりが大きく、先進国の標準と比べればさらに雲泥の差がある。例えば、中国の標準ではBHC（ベンゼンヘキサクロイド）の摂取量は米国の84倍で、日本の標準の15倍である。DDTの摂取量はオーストラリアの標準の16倍、米国及び日本の標準の24倍である。

中国の大気汚染で最も重大で、影響の範囲が大きいのは空気中の浮遊顆粒物である。華北12の大都市の大気中の顆粒物の平均濃度は860マイクログラム/立方メートルで、ニューヨークの約20倍、ロンドンの40倍で、世界保健機関の許容する濃度の9.6倍である。中国のほとんどの都市の浮遊顆粒物汚染は世界衛生組織の標準（90マイクログラム/立方メートル）より数倍の多さとなっている。全国の都市の平均値（309マイクログラム/立方メートル）は世界衛生組織の標準の3倍であり、ニューヨークの7倍分、ロンドンの14倍となっている。中国で制定した国家の一級基準（優）では総浮遊物は150マイクログラム/立方メートル以下とするが、それでも世界標準の2倍近いばかりでなく、この基準ですら沿海部の都市のわずかな場所が達成できる程度なのだ。中国の炭素排出量及び硫黄の排出量は世界でダントツの一番だ。中国はすでに世界で最大の温室ガスの排出国の一つとなっているのである。高度の汚染が生態の疾病の急速な増加を導くのは必然だ。生態疾病には三つの特徴がある。それは緩慢に影響があらわれること、影響が蓄積されること、影響が爆発的にあらわれることだ。次第に蓄積されていったり、またしばらく経ってか突然に現われると、しばしばその原因が分からず、爆発的に現れ

¹⁹ 中国環境発展国際合作委員会：この委員会は1992年に成立、中国と外国の環境発展領域の官僚と専門家により成り立ち、非営利国際的な高級諮問機関である。主な目的は、国際環境発展領域の成功経験の交流、伝達、中国環境発展領域の重大な問題への研究、中国政府のリーダーたち及び各階層決定者たちへの戦略的、警告的な政策アドバイスの提供、持続的な発展戦略への促進を支援して、資源節約型、環境にやさしい社会を成立させることである。

た後でもしばしばその根本を治す方法がない。研究によれば、有機汚染物質と重金属の汚染は生態からくる疾病の最大の原因で、ガン・心臓や脳血管の疾病、及び糖尿病などのハイリスクな病気の発病原因の80%~90%が環境汚染によるものである。専門家は、身体内に汚染物質を15年~20年ため続けると、ついには治す薬もないまま死んでしまうと指摘する。淮河沿岸の住民の死亡率は山東・安徽省の平均水準の3割以上高く、ガンの罹病率は平均の2倍である。淮河沿岸の農村の青年の身体状況は軍隊に参加するための要求を誰も満たしていない。高度の汚染は、中国の男性の生殖能力も急激に衰えさせている。上海の精子バンクのデータが示すところでは、精子提供者の中で基準に達したのは20%に過ぎなかった。提供者700名あまりの85%以上は立派な大学生であったが、その中の多くの人物の精子が不合格だった。主に精子量が不足だったり、生存率が低かったり、活動性が不足するところにそれが顕れている。

中華民族はすでに挽回不可能な程度にまで国土の正常な維持能力の限度を突き破ってしまった。我々は今正に生命維持体系の総崩壊に向かって一歩一歩近づいているのだ。中華民族は曾て多くの困難を経験してきたが、これほど危険な情況はない。今日のように民族の生存のための基本的な条件を破壊してしまうことはこれまでであったためしはないのである。中華民族が本当に“最も危険な時期”に到達したとすれば、それは全人類がみな“最も危険な時期”を迎えたことにほかならない。

生態の危機に面して、理性を放棄して事実を無視したり、怯えて真相を回避したり、或いは消極的に災難に対応したり、ましてや明日の大災害など知ったことかと今日が最後のどんちゃん騒ぎをおこすなどは、気候の変化の危機よりもっと恐ろしいことだ。なぜならば正にこのような態度が生態体系の総崩壊を導きまた加速させてしまったからである。

私たちは事実を直視しなければならず、科学の予測を信じなければならない。

私たちは全力で危機を和らげ、災難の素早い到来を防がなければならないし、少なくとも先に延さなければならないのだ。もちろんそれに対して如何なる代償を払ってもである。

私たちは勇気を持って生態に責任を負わねばならない、たとえ最後には災難に直面し、悲劇に出会うとしても、希望と尊厳と努力を決して放棄してはならないのだ。

我々はこの星を救わねばならない、同時に自分自身でその贖いをしなければならない。我々は人類が過去及び現在の無知と浮ついた精神が起こした結果のために、また現代及

び後代に生き残り得たもの達のために手本とならねばならないのである。

これが私たちの宿命である。

これこそが私たちの宿命なのだ。

正に生態危機の危険性を意識し、勇気を持って積極的に危機に対応し、文学者が尽くすべき生態への責任を達成さんとして、欧米では20世紀60年代より、中国では20世紀の80年代より始まって、生態文学は発育盛りの勢いで、各種の圧力や偏見を打ち破り、堂々と文壇に登場し、瞬く間に大きく発展したのである。

生態文学者は創作の過程において全ての作家たちに問いかける、「文学は詰まるところ私たちが地球の生活により良く適応させる創造行為であるのか、それともその生活から疎遠にする行為なのか。情感を超えた進化と自然選択の角度から見たとき、文学は詰まるところ私たちが生き延びるために役に立つのか、それともその絶滅を加速させるのか」と²⁰。人類の文学は生態の危機に責任をもたねばならない。反生態文学こそが生態危機をもたらす深層の文化原因の一つなのだ。反生態文学の継続は生態の災難の継続にほかならない。文学者は必ずや文学の改造を通して自然に対する犯罪を終わらせ、かつその罪を償わなければならないのだ。文学がもし生態危機を抜け出すための出口の一役割をなしえねば、それは危機を導くものになってしまう。文学は地球と人類が生き延びるための助けとなるべきであり、思想文化からその絶滅を加速する後押しに絶対になるべきではない。生態文学は創作活動に終わるものではなく、それは救済の活動でもある、つまり地球を救済し我々を救済する行動なのだ。

2. 副次的原因 内部的動因

生態文学の誕生には文学自身の発展規律の作用によるという原因もあるが、これは決して主要な原因というわけではない。生態文学の出現は、文学で表現すべきことが日増しに各方向に広がり、それに連れて平衡を保とうとする文学の健康な発展の内在的動力作用の結果なのである。完全に平衡が保たれた文学表現の領域は三つの大きな部分を持つ、つまり人間自身（人間性、人格、思想、情感、感覚、潜在意識及び人の外貌、言語と行為など）、人類社会（人と人との関係、人と社会の関係、人類の社会生活、人類の

²⁰ 原注 Joseph W.Meecker : *The Comedy of Survival : Literary Ecology and A Play Ethic*, Third Edition, Tucson : The University of Arizona Press, 1997, p4.

文化を含む)、自然(自然体系、非人類の自然体系、人と自然の全体的関係、人と各種生態環境との関係、人と自然物との関係、非人類自然物の間の関係、非人類自然物と自然全体との関係など)が含まれるものだ。しかしながら、人類文学の発展を歴史軸から見ると、文学が自然というこの表現領域へ向けた関心と描写は非常に足りないことが分かる。それぞれの時期には確かに自然を或いは人と自然の関係を描いた作品はある程度あるのだが、全体的に見ると、文学の自然に対する表現は人と社会に対する表現とは比べものにならない。文学の体系はアンバランスになっており、文学の発展は奇形的だったのである。

しかしながら、文学の発展が持つ内部規律は結局は文学に調整を求めるものだ。一定時期社会へ関心が多く向けられるとすれば、次の一定時期は人間自身に多くの関心が向けられることになるし、一定時期内容に多くの関心が向けられれば、次は多くの関心が形式に向けられることになる。ある時代では情感や思惟の表現に重点をおけば、次の時代では感覚や潜在意識に重点を置くだろう。しばらく“外に向かう”なら、その後は“内に向かう”はずだ。このような自己調整、場合によっては行き過ぎを矯正するような発展が、全体的またマクロ上から文学の全面性と平衡の維持を保証しているのだ。人類の文学がまだ始まったばかりの時代は、人と自然環境は人間と社会の最も重要な問題であったから、世界の各民族の文学はかなり多く自然を描いた。しかし、人類文明の発展に伴い、とりわけ工業時代に入って以後は、自然が人類に与える生存への脅威が、人類の力量の増強によって、もはや特別に大きなものだと見られなくなったので、人類の文学は全体的にその重心を人間自身及び人類社会に移したのだ。加えて文学は人類の芸術創造行為であるので、必然的に人類を中心に置く傾向がある。文学の発展が人と社会へと傾いて、自然を疎遠にしたのも理解可能である。20世紀の後半以来では、ますますひどくなっていく環境危機がもう一度文学の自己調整という内部の衝動を刺激したために、自然から遠ざかり続けて千余年ないしはもっと長い間遠く離れていた文学が、ついにはまたもや自然へと回帰してきたのである。

それは20世紀後半以来の文学発展として現れており、生態文学も当代文学の自己調整の強化及びその延長の現れであることが見て取れる。生態文学は、意義を重んじ、価値を重んじ、責任を重んじ、文学の社会効能と自然効能を重んじる文学で、介入性がとても強い文学である。それは“純文学”ではなく、その肩には社会思想文化への批判、生態意識の普及、生態美学の育成、生態文明の建設という重責を担っている。この点か

ら見て、生態文学は20世紀後半以来の文学が、再度“外に向かって方向を変え”、“意義と使命に向かって方向を変え”、“社会に向かって方向を変え”“文化に向かって方向を変え”するという文学自身の規律によってもたらされた結果でもある。20世紀の文学発展は、“内心への方向変え”、“哲理への方向変え”と“テキスト形式への方向変え”といった傾向がそれぞれ現れ、またその意義や価値も打ち消してしまう傾向も現れてきた。これらの傾向自身は確かにその合理性ないしは必然性すらあったが、後にそれぞれ程度は異なるが行き過ぎへの矯正が行われている。20世紀の後半より、文学の内部規律は文学の発展に調節を加え始め、大量の社会批判や、ジェンダー問題、文化衝突の問題を重視する作家や作品が大量に出現した。このような文学発展の形勢のもと、生態文学は一定程度において当代文学自身の規律が文学発展を更正しようとしての産物とも言えるだろう。生態文学はこの更正をさらに強化した拡大させるものなのだ。つまり人類社会に関心を向けることから自然界にまで関心を向けるところまで広げさせ、人と人との関係（両性の関係・種族の関係）に関心を向けることから人と自然との関係に関心を向けるところまで広げさせ、社会正義に関心を向けることから生態の正義に関心を向けるところまで広げさせ、人類社会の一般的な価値に関心を持つところから生態全体価値に関心をもちつとところまで広げさせ、社会問題や社会災難を導くような文化批判への関心から生態危機や生態の災難を導く文化批判に関心をもちつとところまで広げるというものだ。

生態文学が生まれた主要な原因と副次的な原因、外部原因及び内部原因が認識された後には、そこからさらに生態文学誕生の必然性と必要性を知ることができる。生態文学は人と自然の関係の悪化及び生態の危機からくる必然的なもので、文学自体の健康的な発展の必然的産物でもある。生態文学が発展することは生態の危機を和らげ、生態体系を保全し、そしてまた人類を含む全ての生物の健康な存在を持続するために必要なものであり、また文学が健康で全体的な平衡のもとに発展するため必要なものなのである。

第二節 生態文学の定義

“生態文学”という述語を定義しようとすれば、まず“文学”の語を修飾する“生態”の語の意味をはっきりさせねばならない。現在の学会では“生態文学”と“環境文学”をしばしば混用して使用している人が多くいるからであり、また多くの欧米の学者が

“環境文学”という言葉を使う傾向にあるからだ。例えば、現代言語学会が出版したフレデリック・ヴィッキー編集の教学参考資料では『環境文学教学』と呼ばれており、生態文学と関係する欧米最大の学術組織は“文学・環境研究会”(ASLE)という名前で、その機関誌は『文学と環境』(ISLE)という名前である²¹。従って、“生態”の持つ意味を確定しようとするなら、まずはその言葉と“環境”という言葉との違いを明快にする必要がある。

1. 修飾語に“生態”を選ぶか“環境”を選ぶか

そもそも“生態的”(ecological)の語を使って生態文学と呼ぶべきなのか、それとも“環境的”(environmental)の語を使って環境文学と呼ぶのが良いのか。この中にある問題は、決して呼称の統一とか、述語を内容をはっきりさせるというような単純なものではない。問題の核心は、それぞれの術語を支えているものがそれぞれ明快に区別できる思想概念だということだ。つまり一方は生態主義(ecologism)であり、もう一方は環境主義(environmentalism)なのである。二つのうちいずれかを取れば、そちらの思想概念に従うことになるが、それは他方の思想概念を排斥することも意味する。となると、二つの術語のどちらを選択するか、それはこの二つの思想概念のどちらを選択するかを事実上反映するものなのである。

ここにいう“生態”とは、主に生態思想をさすもので、生態主義の導くところになる。生態主義の核心は生態全体主義で、それは主に生態学の体系観、連携観、調和観、平衡観から来るもの、ルソー、ダーウィン、エンゲルスの生態思想から来るもの、ハイデガーの生態哲学から来るもの、土地倫理学、ディープエコロジー及びガイア理論など現代の生態全体を考える生態哲学などから来るものなのだ。生態系主義の核心思想は、生態全体の利益を最高の価値とするものであり、人類の利益に最高の価値を置くものではない。生態体系の全体性・調和・安定・平衡と存在持続と保護に資するかどうか、それが全ての事物を計る根本的な尺度となり、人類の思想文化・生活様式・科学技術の進歩・経済成長及び社会発展を評定する最終的な基準となるのである²²。

²¹ ASLEはThe Association for the Study of Literature and Environmentの略称。ISLEはInternational Symposium of Literature and Environmentの略称

²² 原注：多くの学者は生態全体主義を“生態中心主義”(ecocentrism)と呼んでいるが、

“環境”となると、主に環境思想をさし、環境主義の導くところになる。環境主義は主に“弱人間中心主義”或いは“開明人間中心主義”“現代人間中心主義”²³から来るもので、“新ヒューマニズム”、“拡大化された博愛主義”に由来するものだ。環境主義の基本精神は、自然環境が日増しに悪化して人類の生存を脅かすことが分かってより、人類の生存の継続と持続的発展のために、また子孫たちの基本権利のために、環境を保護し、合理的に環境資源を利用し、さらに人間内部の倫理的配慮を動物や植物及び非生命存在物にまで広げて及ぼすことを主張する。同時に人間中心主義を堅持し、人間と自然の二元論を堅持して、人類の現存する文化や生産活動の方法を維持し適度に改良しようとするものである。

現代の生態思想家は生態主義と環境主義という二つのイデオロギーに対して厳格な区分をして、“生態主義”と“環境主義”は全く異なるものだと言っている。ヘイワード (Tim Hayward) は『生態思想導論』(*Ecological Thought: An Introduction*, Cambridge: Polity Press 1995) の中で、スミス (Mark J. Smith) は『生態主義：生態公民権へと歩む』(*Ecologism: Towards Ecological Citizenship*, Buckingham: Open University Press, 1998)、バクスター (Brian Baxter) は『生態主義序説』(*Ecologism: An Introduction*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1999) で、ドブソンは『緑色政治思想』の中で、共にこのイデオロギーの違いについて明確に論じている。ドブソンは特に「環

これは正確ではない。生態全体主義の基本前提は非中心化 (decentralization) であって、その核心的な特徴は、全体及びその全体にある関係性の強調であり、決して全体内部のある一部分を中心とするものではないからだ。中心がないのだから“中心主義”は出てこない。生態中心の語は推敲には耐えられるものではないのである。中心があれば辺縁ができ、非中心の部分があれば、周辺環境もできあがる。そうなると、何が生態中心主義の非中心部分となるのか、地球中心と相対する部分は何なのか。まさか太陽系とか宇宙全体だとかいうわけではあるまい。もし中心主義自体を無くさずに中心主義の思想を依然として続けるようなら、我々はやはり人間中心主義の枠の中から飛び出すことはできない。それは、従来あった範囲を、“動物中心主義”から“生物中心主義”へ、そして“地球中心主義”や“生態中心主義”へと不断に拡大することになるものだ。しかしながら、生態全体主義というのは、思惟方式の革命であり、中心論及び二元論から全体論へと進む革命なのである。そこでは全体が強調され、決して中心は準備されない。生態中心主義という術語では、この思惟方式の革命の主要な変化と基本精神を示すことができないのだ (『欧米生態文学・第1章』による。再掲された『生態文学』ではこの注は省略)。

²³ “弱人間中心主義”は“weak anthropocentrism”、“開明人間中心主義”は“enlightened anthropocentrism”の中国語訳のようで、共に環境との共存を図って資源循環型社会をめざすもの。中国ではこの語を題名に用いた論文も出されている。

境主義と生態主義は本質的に違うもので、この違いに混乱があると必ずや重大な思考の錯誤を導くだろう」と強調している²⁴。

“環境”という修飾語の使用を主張する学者には一つの理由がある。つまり生態学とは生物とその環境との関係を研究する科学なのだから、学際的な学問である生態文学/生態美学/生態批評/生態社会学……の成立及びここで行われる研究もやはり文学/美学/批評/社会学……と環境との関係を探るものであるし、またこの学際的な学問の成立及びそこでの研究によって人類及び人類社会と自然環境の関係を探るのが当然だというのだ。20世紀90年代よりずっと“環境批評”と“環境主義”を標榜してきた有名な批評家ローレンス・ビュエルは、“環境”という言葉の使用によって、“文学と環境の研究という学際的な学問の総合性がより明快に示される”と考えている²⁵。

しかしながら、たとえ早期に生態の角度から学際的な研究をした人文社会学者たちがかかなり多く生態学、なかでも生物学を参考にしたとしても、もしすこしでも全体的な面から考察を加えれば、人文社会科学の領域で生態的な視角による学際的な学問研究が参考にしたのは決して生態学の具体的な研究成果ではないことがすぐに分かる。それらは自然科学と人文科学の単純な足し算ではないし、生態学の術語と方法を用いた人文社会科学的研究ではない。生態的な視角の人文社会科学的研究が“生態的”研究である理由は、それがあいくつかの最も基本的な生態思想概念、例えば生態全体観、生態システム観、生態調和観、生態平衡観、生態持続観などのようなものをちゃんと持っているところに根本的な理由がある。機械的に生態学の術語や方法を利用することはもはや多くの学者によって廃棄されてしまっている。例えば、生態批評家のクローベルは“生態批評は生態学、生物科学、数学の研究法或いは如何なるその他の自然科学の研究方法をも文学分析に用いようとするものではない。それは生態哲学の最も基本的な観念を文学批評に導入するだけのことだ”といっている²⁶。

では、生態学者が決して忌避はしない“環境”の語に、人文社会科学領域の生態主

²⁴ 原注：Andrew Dobson, *Green Political Thought*, Third Edition, London: Routledge, 2000, p.2. 日訳『緑の政治思想－エコロジズムと政治変革の理論』（ミネルヴァ書房）、訳文は未確認。

²⁵ 原注：Lawrence Buell, *The Future of Environmental Criticism, Environmental Crisis and Literary Imagination*, Malden, MA: Blackwell Publishing, 2005, p.viii.

²⁶ 原注：Karl Kroeber, *Ecological Literary Criticism; Romantic Imagining and the Biology of Mind*, New York: Columbia University Press, 1994, p.25.

義者がこのような反感を持つのはなぜだろうか。それは以下の理由による。生態学の間では“環境”の語を使用しても、それは中心的な主義思想になるものではないが、人文社会科学の研究で人類の概念に対する“環境”の語を使ってしまうと、必然的に人間中心主義を導いてしまうからである。生態学の中では、如何なる種も主体でありまた中心であり、またその他の種の環境を作る要素でもあるので、どの種も常に中心の位置に留まることはない。科学者が松の木を研究するときは、木の下草はその環境要素となるが、草を研究するときには、その上の松の木が今度は環境要素となる。こうして、科学の角度ならば、如何なる種のものであれ生態体系の中心にあることはなく、全ての種はそれぞれで発展進化すると同時にまた共に関係する別の種の環境要素なのであり、生態系の全体こそが最も重要で、最高のものなのだ。これに対して、人文社会科学はその性質から研究の対象を人類と人類社会のみに限定してしまう。主要な研究対象が固定化されると、必然的に植物・その他の動物・河川や山脈海洋に影響を与える環境要素として人類を研究することはなくなるし、また非人類である物質を主要な対象として研究するはずもない。そこで、環境論は必然的に思考を中心とした価値を中心とする人類側からの視点を導くことになる。“中心”と“環境”は生態学の中では、変化するものであり、相対的なものであり、交代可能なもので、暫時的な中心（正確に言えば特定の研究視角の中心におかれた研究対象のこと）または暫時的な環境というものがあるとしても、生態学の中で生態系が最高のものだと強調されることに何の影響も与えない。しかし、もし機械的に生態学の“環境”を人文社会科学領域に移入すると、“中心”と“環境”は固定的なもの、絶対的なもの、交代不可能なものとなってしまう、人が永遠に中心となり、全ての自然物時には自然体系全体が環境とならざるを得なくなる。そうになると、生態全体観、生態体系観などの核心となる生態思想は損害を受け、時にはその成立すらも危うくなってしまう。このような認識から、生態主義者にとって、自然科学の領域で“環境科学”“環境研究”“環境汚染”“環境評価”と称されることは受け入れられても、人文社会科学領域における生態に関する研究では、“環境”の語に変えて“生態”の語を用いるべきだということになる。

哲学者のフーコーは“環境”概念の起源と変化を考察し、環境の語の当初の意味が人工環境を指していたことを指摘した。“人間の中の自然が死んで、環境なるものが誕生したのだ。これはまさしくルソーの言葉ではなかったか。彼が指摘した大陸の土地が沈むほどの宇宙の災難、その代表は正しく自然の終息と人為環境の開始である。環境とは

生物の前に広がる自然が代表する肯定的な力ではなく、逆にそれは否定的な力であり、豊かな自然を生物の前から奪い取っていくものなのだ。この退潮の過程において、或るものが自然の地位に変わって登場する、それが人間の豊かさであり、反自然を標榜する虚妄な世界なのだ。”²⁷ フーコーの論述から分かるのは、“環境”の語の登場こそ、人類と自然が調和していた時代の終焉を示し、反自然への始めを示し、人間が自然の中心であることが自覚されて、全ての非人類の物質が—もちろん自然であろうと人造物であろうと—人類文化を際立たせるための、人類に仕えるための、人類の略奪利用に供されるための“環境”と見なされたことを示すのだ。

イギリスの生態批評家ジョナサン・ベイトもまた語源学から“環境”の語の原義を分析している。彼がいうには、“環境”という言葉は、サミュエル・ジョンソン博士の英語辞典の中には出ていない。この言葉の現代的な意味は19世紀の社会分析と生物学分析の表記の中に現れるもので、‘ある体系の状況或いは条件、特に物理条件をさし、一人の人或いは一つの団体がその中で生活し、仕事をし、発展をする、または一つの事柄がその中に存在する或いはそこで発展するようなものを指し、またある植物或いはある動物に影響を与える外部条件もまた指す’と指摘する。この語源分析より、“環境”が明らかに二元的思考の産物であることが分かる。“環境”とはある中心的存在の外側で、その中心に存在する物質を取り囲み、その中心に服務し、影響を与えるものなのだ。ベイトはさらに進めて、“環境’は‘周囲を囲む’”という意味だ。環境主義者は我々を取り囲む世界に関心がある人々なのだ。この世界が我々を取り囲んでいるとは、人間中心主義を意味し、自然の価値の維持継続とは詰まるところ人間によって与えられるものであり、自然の作用の維持継続とはただ人間が与えるだけであることを意味する”と指摘する。従って、ベイトの結論は、“環境という語を使うことは間違っているに違いない、

²⁷ 原注：[法]福柯：《古典時代瘋狂史》、林志明訳、三聯書店2005年版、第527頁。訳注：訳者の見た日本語の訳で該当箇所と思われるものを参考までにあげておく：「自然が人間の中で死にかけ始めると、『媒体』は活動し始めるのである。瓦解する諸大陸の宇宙的な破局の中で、自然が終わって人間的な『媒体』が始めることを、ルソーが示したのは、このような仕方によってではなかったか？『媒体』とは、生物にさし出された姿での自然の積極性ではない。反対にそれは、充実している自然が生物から遠ざかっていくときの消極性である。こうした後退においては、こうした非自然においては、何かが自然にとって代わるのである。人工的な充実であり、反自然が明らかになるむなし世界である何かが。」(フーコー『狂気の歴史—古典主義時代における』新潮社1975 田村俣訳 p.395)

なぜならば、一人が中心にいて万物が取り囲むイメージを準備してしまうからだ。生態系という語であれば確かにかなり良い用語であろう。なぜならば、生態系には決して中心はなく、それは関連の網だからである”と述べる²⁸。

生態批評の創始者のひとり、シュリル・グロトフェルティは、“‘環境’は人類中心でありまた二元論の術語でもある。それが意味するのは、我々人類が中心で、その周囲で我々を取り囲む全ての非人間の物質、それを環境というのである。これに対して、‘生態’といえれば相互依存の共同体、一体化された系統及び体系内の各部分間の密接な連携を意味している”と指摘する²⁹。

自然保護の面では、環境主義が指導する環境保護と、生態主義が指導する生態保護とは根本的な違いがある。前者は、自然保護の直接の目的は人類の利益のためであり、後者では自然保護の直接の目的は生態系の平衡の安定と調和の取れた持続であって、同時にまた人類をその中に含む全ての生物・非生物をひっくるめた保護も行うのだ。先に生態を保護しそれによって人類を保護することと、先に人類を保護しそれから環境を保護することとは、道は違っても到着点は同じ、という選択には決してならない。生態学者は人類のためのみに環境を保護しても成功するはずがないと固く信じている。生態主義者は、人類社会の半世紀にわたる環境保護ではその成功は少なく、厳格に言えば失敗であったと指摘する。環境保護の進展の度合いは生態の危機の度合いに比べて遠く及ばないのである。その原因を突き詰めると、その主要な問題は、生態文明への変革を重視していないところ、生態意識を大いに提唱して普遍的な受容までに到らせることができていないところ、人間中心主義の環境観を放棄していないところにある。生態系が人類に残した時間、つまり生態系の総崩壊への時間はすでにもう少ない。もう限界に近いというのは確かなのだ。この状況の下、人類には以下のような再検討が必要である。つまり、我々の環境保護理念に誤りはなかったか、環境保護政策と環境保護運動の思想的基礎に誤りはなかったか、別の考え方に改める必要はなかったか、人類中心の環境主義を捨てて生態全体の利益を最高の価値とする生態主義に指導的思想を向かわせる必要はないのかと。

²⁸ 原注：Jonathan Bate, *The Song of the Earth*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2000, pp13, 138, 107.

²⁹ 原注：Cheryll Glotfelty & Harold Fromm (ed.), *The Ecocriticism Reader; Landmarks in Literary Ecology*, Athens: The University of Georgia Press, 1996, p. x x.

ベイトが分析しているには、「如何なる環境運動の参加者であってもこう言うはずだ、美しいと見なされる自然現象であれば容易に資金を集められるだろう、例えば山地の湖とか古い森林など。人間中心主義が自然物の保護を叫ぶことも同様に簡単だ。例えばあどけないパンダや、或いは笑ったり言葉の才能を持つようなイルカなどを保護する時のように。しかしながら、絵には似つかわしくない風景だが生態上ではとても重要な自然現象、例えば泥炭沼とかミミズの群生などは、人々の興味を引くのはとても難しい。何本かの道路建設をやめたり、いくらかの大鷹を救うことではこの世界の生態危機を解決することはできないのである。」³⁰

生態主義者は次のように考えている。つまり、もし人間中心主義を超えて、生態一体論を打ち立てられぬとすれば、また個人の利益を超えて生態系全体の利益を最終的な判断基準とできなければ、本当に有効的な生態の保護と生態平衡の再構築は不可能だし、自然と調和して暮らすという良好な関係は回復しないのだと。人と自然との問題を処理するに当たって、人間を根本とし、人間を目的とし、人間を中心とするという態度を貫くかぎり、人類は自然物が生態系に対する価値ではなく、自然物の人間に対する価値の有無でそれを保護するかどうか或いは保護にかける力を決めるのは必然的だ。それがもつ人類への直接的な価値及び間接的な価値を人類が認めなければ、保護を加えることはなく時には恣意的に破壊すらするだろう。しかし、“自然物は自然のままに”という生態原則に従って共存共生しようとしなければ、人類は必然的に自分自身の利益や場所、民族、国家などの局所的な利益を生態全体よりも上に置いてしまうだろうし、必然的に自分の物欲・私利及び自然へ危害を加える行為へ向かうので、人も自分も騙す理由や口実を捜すことになるのである。

人類自身の利益を超えて生態系の全体的な利益を自らの任務にすることの実現のためには、生態保護の思想文化の前提として生態系文明の構築と生態系意識の普及がなされねばならない。生態系主義者は、“地球を救う道はただ一つ、それは徹底して欧米の価値体系を変えることである”³¹と意識するに至っており、人間中心主義を放棄した以上は、人間中心主義の色合いが十分濃厚な環境主義をも放棄しなければならないのであ

³⁰ 原注：Jonathan Bate, *The Song of the Earth*, Cambridge MA: Harvard University Press, 2000, p.138.

³¹ 欧米の価値体系：原文は「西方の価値体系」。西方はギリシア文明に始まり現代に続く欧米の各国を一括してさす場合が多いので、ここでは欧米と訳した。

る³²。生態全体の保護の最も重要な任務は、生態系の世界観と価値観を打ち立て普及することであり、それは生態文明を創造し、非生態及び反生態の思想文化や生活方式を改革することなのである。なぜならば、生態系の危機は根本的には、思想文化の危機といえ、科学技術の危機、経済の危機、工業の危機というものではないからだ。“我々が生態系に対して何をするのかは我々の人間と自然の関係観念によって決まる”³³、“我々が今日直面している地球全体の生態危機は、生態系の機能によるものではなく、我々の倫理体系の作用に起因する。”³⁴ “我々の価値観、世界観及び経済の組み立てには、確かに革命が必要だ。なぜならば、文化伝統は生態を無視して経済や技術発展を追求するという前提の上に建てられており、我々の生態系の危機はこの文化伝統に根源があるからである。”³⁵ 生態保護と環境保護には違いがあること以外に、生態主義と環境主義はほかに多くの重要な問題において先鋭で深い対立がある。二者は、生態系を至上とするところと人類を中心とするところ、一体化と二項対立、自然の主体化と自然の対象化、調和共存と征服略奪、生存と占有、人格完成への推進力と欲望満足への推進力、質素な生活観と消費主義、自然規律の遵守と自然規律への挑戦、発展の受容と発展の持続、環境を守る科学技術観と科学技術至上観、思想文化の変革と思想文化の維持改良など一連の大問題において、異なった態度と視点をもつのだ。

二元論の根は深く固く、また人間中心主義は自然を征服し占有しようという観点と緊密に結びついている。デカルトの『方法序説』の中では、人と自然関係において二元論思想が自然の制御と改造に向かうことが明確に示されている。二元論によって我々は“火・水・空気・星・天空及び全ての我々を取り巻く自然物を知ることができる”、我々はこれによって十分に“それらが持つ全ての活用可能な部分を利用し、それによって、我々は自然の主人であり占有者となれるのだ。我々はそもそも主人であり占有者なので

³² 原注：Jonathan Bate, *The Song of the Earth*, Cambridge MA: Harvard University Press, 2000, p.138.

³³ 原注：Lynn White. “The Historical Roots of Our Ecologic Crisis”, Cheryll Glotfelty & Harold Fromm (ed.), *The Ecocriticism Reader; Landmarks in Literary Ecology*, Athens: The University of Georgia press, 1996, p.12.

³⁴ 原注：Donald Worster, *The Wealth of Nature: Environmental History and the Ecological Imagination*, New York: Oxford University Press, 1993, p.27.

³⁵ 原注：Donald Worster, *Nature's Economy: A History of Ecological Ideas*, Second Edition, Cambridge: Cambridge University Press, 1994, p.355.

ある。”³⁶ 二元論は人間の思惟に深い影響を与えている。たとえ、環境問題を高度に重視する現代の学者や思想家にあっても、それはなかなかぬぐいきれない思惟形式なのである。学問世界にあって、これほど多くの人が頑強に環境説を保持し、生態説を拒絶する所以には、ある大きな理由がある。それはつまり彼らが根本的に自然を環境と見なし、またそれを人間と相対する別の要素として配置してしまい、人間に有利か不利益かという角度からだけしか研究せず、人類自身の問題の解決と脱出の道を求めるだけで、自然全体を救う道を捜さないからなのである。しかしながら、このような環境研究の結果は、当然ながら二元対立をいっそう強化してしまうことになった。

生態思想と生態一体文明の論理の起点の一つは、二元論を超えようとする事だ。ダリスは『生態批評』という書籍中この問題を指摘してこう言う。“生態批評とは、行動主義者としての哲学であり、そこで基本となる任務、それはつまり欧米の言説と実践の中にある人間と自然を分け隔てる二元論の思考を超えることだ。環境問題は以前二元論の負極側に置かれて関心が持たれていた。両極に対立させるこのような思考は破壊性を持つ二元論の観念をひたすら存続させるだけなのだ。まず学术界に先のような意識を造り出してこそ、本当に二元論の空間を縮めることができるだろう”³⁷。エリック・スミスは生態批評の検討を主旨とした論文の中で明確にこう述べている。“生態批評の基本趣旨は、人間中心主義と二元論思想から脱却して別の道を切り開くことだ。”“文化と自然を根本的に分離する思想については、欧米の歴史と欧米の認識論の発展史上にも類似の現れが見られる。つまり自我/他者、主体/客体、靈魂/肉体などである。生態批評はこれらの観念に対してその領域からの応答をし、この二元論の対立は弊害をもたらすものだと考えている。それは主体が客体を卑しいものとして蔑視すること、文化が自然を対象化するというところにある。”“人類文化と環境を二分化することは、生態批評の直面する挑戦の厳しさを強化することになる。二元論の宇宙観—宇宙は主観世界と客観世界に区分されるというもの—という設定は、正に我々が良く用いる‘環境危機’という術語の範疇に属すものだ。”³⁸ 生態に基づく思想文化は、人間と自然を分離して自然物

³⁶ 原注：Descartes, *Discourse on Method and the Meditations*, trans.by F.E. Sutcliffe, Harmondsworth: Penguin, 1968, p.78.

³⁷ 原注：Donelle Dreese, *Ecocriticism: Creating Self and Place in Environmental and American Indian Literatures*, New York: Peter Lang Publishings, 2002, p.4.

³⁸ 原注：Erie Todd Smith, “Dropping the Subject: Reflectings on the Motives for an Ecological Criticism”, Branch, Johnson, Patterson and Slovic (ed.), *Reading the Earth*;

を人類生活の環境と見なすばかりの二元論を必ずや打ち破らねばならず、この二元論によって導かれる重大で恐ろしい結果を深く分析して批判しなければならぬ。従って、自己の理論構成及び術語系統の中に二元論の痕跡を絶対に留めてはならないのだ。

生態主義は自然の扱い方において自由主義とは明らかな対立があるが、環境主義の方は自由主義と良く結びつく。従って、環境主義者は生態主義が“自由主義の核心観念に背いて進むものだ”、“我々の生活の最もプライベートな部分を侵害するもので”、最も基本的な個人の自由を転覆させるものだと批判する。例えば、金儲けの自由、物質的利益の最大化の自由である³⁹。生態主義者の反撃はこうだ。自由主義、ヒューマニズムというものは、不可分なもの、変化させられないもの、生態の日々に厳しさを増す現実に基づき修正できない教条といったものでは決してないのだと。生態主義はヒューマニズムや自由主義を完全に否定するものではなく、生態系が支えられる能力に基づいて必要不可欠な制限を行おうと主張するものだ。“自由は分割しても良い……もし我々が残しておける自由を保存しようと思うなら、我々は一部分の自由を制限する必要があるのだ。”⁴⁰ 人類の自由な発展が生態危機を直接導いているのだから、人類の自由の一部分は制限される必要がある。自由が存在し続け人類が生存し続けていくためには、人の権利の内のいくつかは放棄せねばならない、少なくとも部分的な放棄は必要である。とりわけ無限の物欲の満足を追求する権利は放棄されねばならない。物質的生活と経済発展のある種の自由と権利を制限することは、その他の基本的人権や基本的自由を制限することを意味するものではない。人類が選択すべきことは、現在の生活様式の自由を求めるのか、それとも未来に長く続く生存の自由を求めるかということなのである。“我々の生活・健康及び生存に対する巨大な脅威と比べれば……現在選択している生活方式を自由に追求することへの強調は全く如何なる価値もない。緑色思想家⁴¹が強調するのは、我々が現在既に選択している生活方式の自由を制限することは不可避であるということ

New Directions in the Study of Literature and Environment, Moscow, Idaho : University of Idaho Press, 1998, p.30.

³⁹ 原注 : Luke Martell, *Ecology and Society, An Introduction*, Cambridge UK : Polity press, 1994, p.142.

⁴⁰ 原注 : S.Irvine, A.Ponton, *A Green Manifesto ; Policies for a Green Future*, London : Macdonald Optima, 1988, p.22.

⁴¹ 緑色思想家 : 緑色は環境保護を代表する色で、日本語では「環境や生態保護の思想家」といった意味になる。

で、もし、我々が主体的に制限しなかったら、残酷な方法で制限しなければならなくなってしまうのは当然なのである。”⁴²

生態主義は伝統的な価値観、生存方式、生産方式、発展モデルに疑問を呈した批判もして、生態危機をもたらした思想文化の根源を探り出し、思想文化上の大きな変革を主張している。環境主義となると文芸復興及び啓蒙運動以来の欧米主流の価値観に全面的に変革を加えることには反対しており、その全体的な維持という前提の下で、改善と改良とを主張するばかりだ。ドブソンは生態主義と一見すると似ている“近親”つまり環境主義との本質的な差異を明快に指摘している。“環境主義が主張するのは経営管理の方法で環境問題を解決しようとするもので、現在の価値観や生産及び消費を根本的に変えなくても、環境問題は解決できると信じている。しかし、生態主義のほうは、持続可能で真実に存在するためには一つの必要な前提があると考えている。つまり我々と非人間の自然界との関係の、また我々の社会と政治的生活モデルの根本的改善なのである。”⁴³ 批評家のドミニク・ヘッドは『生態批評は可能か』においてははっきりとこういっている。“‘生態主義’自身は政治的イデオロギーであるが、‘環境主義’は臨時性の行動戦略である”⁴⁴ と。ガルダは『生態批評』の中での確にこう指摘する。“環境”という方法を提示する人、環境主義を堅持する人は、地球全体の温暖化や世界的範囲での汚染のために大いに心配するとはいえ、彼らの多くは生態系の平衡の回復のために社会文化の変革を進めるべきことには反対し、そのうえなお“生活水準を維持するか向上させようと希望するのだ。”⁴⁵ 現在の生活様式、生産方式、消費方式の変更に同意するか否か、啓蒙運動以来の欧米主流の文化に賛成するか否か、それが生態主義なのか環境主義なのかを区別する最も簡単な観測方法なのである。

“sustainable development (持続可能な開発)”の問題の扱い方でも、生態主義と環境主義は明らかに異なる観点をもっている。生態思想家は、環境主義者の楽観的な“持

⁴² 原注：Luke Martell, *Ecology and Society, An Introduction*, Cambridge UK: Polity Press, 1994, pp. 146-147.

⁴³ 原注：Andrew Dobson, *Green Political Thought*, Third Edition, London: Routledge, 2000, p.2.

⁴⁴ 原注：Dominic Head, “The (Im) Possibility of Ecocriticism”, Richard Kerridge and Neil Sammells (ed.), *Writing the Environment: Ecocriticism and Literature*, London: Zed Books, 1998, p.27.

⁴⁵ 原注：Greg Garrard, *Ecocriticism*, London: Routledge, 2004, p.18.

「持続可能な発展」について、その理解には重大な問題があると考えている。「sustainable development」は、「受容可能な発展」として理解すべきなのである。「受容可能な発展」は生態系が受容可能な限度内に発展を制限することに重点があり、その思想基礎は生態全体主義である。この思想を「持続可能な発展」と理解すると、重点は「制限」から「発展」に移動してしまい、発展の持つ制約性のある条件が強調されないばかりか、逆に持続は可能なのだという夢想まで与えてしまうのだ。発展至上主義が「持続可能」の美名をもってごまかせば、危害性はいっそう増す。なぜならば、それによって人々は心配の意識、危機の意識、理性的判断及び生態系、そして人類の後代をその内に含む生命の未来への生存に対する責任感を容易に失ってしまうからである。生態経済学者のタイリーは、『発展を超えて：受け入れるべき経済学』（1996）という書籍中、以下のような事件を紹介している。彼が指導していた専門化グループが世界銀行に“sustainable development”を“限度ある”“環境需要能力を超えることのない発展”と定義しようと提言したところ、世界銀行から拒否されてしまった。理由は、“限度ある”と“受容能力”などの言葉は、世界銀行の経済発展に対する支援を“脅かす”ことになるからだ⁴⁶。この事件は“持続可能な発展”という環境主義の理念の功利性と遮蔽性を明快に示すものである。

正にこの理由のために、生態思想家ナースは以下のように強調する。持続可能とはまずは“生態の持続可能性”（ecological sustainability）であり、“生態の持続不可能に対して反対し続けねばならない”のである。なぜならば生態の全体が安定的に存続してこそ、人類の生存の持続と発展が可能だからだ⁴⁷。生態神学者のモルトマンはさらに歩を進め、人類は発展を基礎とする生存の道と平衡を基礎とした生存の道といったどちらを選ぶのか、と問いかける。彼は、“もし、我々が現代科学技術文明と以前の文明、つまり現代文明以前の文明とを比べれば、その間の本質的な区別をはっきりと見ることができる。それは発展を基礎とする社会と平衡を基礎とする社会の違いだ。以前の文明は決して‘原始社会’ではなかったし、ましてや‘発達のない社会’でもなかった。それらには極めて複雑な平衡体系—人と自然との関係の平衡、人との人との間の平衡及び人

⁴⁶ 原注：Herman Daly, *Beyond Growth: The Economics of Sustainable Development*, Boston: Beacon Press, 1996, p.9.

⁴⁷ 原注：Tucker, Grim, *Worldviews Ecology: Religion, Philosophy, and Environment*, Cranbury: Associated University Presses, Inc. 1994, p.213.

と‘神’との関係の均衡があった。現代文明になって、発展、拡張及び征服に目を向けるようになったのだ。権力を手に入れ、権力を拡大し、権力を防衛する、これらは‘幸福の追求’の道と連動していて、現代文明の中で事実上支配的地位にある価値観念と呼んでも良いだろう。”⁴⁸ ナースとモルトマンの観点は‘受容的發展’について検討する時に注意すべき価値がある。もし、既に現代文明以前には引き返せないというのであれば、少なくとも原始文明の精神的成果を十分にくみ取らねばならない。受容的發展には前提があるし、かつなければならぬからだ。前提とは、つまり生態が持続可能であること及び人間と自然との関係が平衡を保っていることである。正にこの理由のために、フランスの思想家ムーランは、“‘持続的發展’は、生態環境の圧力の下でゆっくりと発展しようとする一種の気遣いであり、まだ発掘されていない論理的な根源なのだ”との確な指摘をする⁴⁹。生態哲学者のカティンスはこれを以下のようにうまく言い表している。“持続可能という言い方はあまりに一般的すぎるから”、“とりあえず立ち止まり”、まずは“持続可能とは何か”を尋ねるなら、“持続可能とはしばしば‘目前の生活スタイルと消費水準を持続すること’と見なされているのは明らかだ。このような持続可能な生活モデルは、現在の状態を持続させるに過ぎない。とはいえ、現在の消費方式、とりわけその消費が突き動かす工業経済の中の消費方式こそ、正しく環境悪化の元凶であって、現在の消費情況こそ改めねばならない事柄なのである……我々が警戒しなければならないのは、持続可能な発展を現在の流行語として経済や消費の持続的な増長を単純に論じてはならないことである。”⁵⁰

生態主義と環境主義のいくつかの主要な問題に対する根本的な違いを分析すると、以下のような結論が得られる。生態文学と環境文学、生態哲学と環境哲学、生態批評と環境批評、生態美学と環境美学、生態保護と環境保護、これらの術語は似たようなものだとか交換可能なものと考えているものでは決してないということだ。その術語を支える思想概念を知ったならば、どちらの用語を選びどちらの用語を拒否するしか選択はない。

⁴⁸ 原注：[徳]莫爾特曼：《創造中的上帝－生態的創造論》、隗仁蓮等訳、安希孟等校、三聯書店2002年版、第38－39頁。日語訳は『創造における神』（新教社）。

⁴⁹ 原注：[法]埃德如・莫蘭：《超越全球化与發展：社会世界還是帝国世界？（グローバル化と發展：社会世界か帝国世界か）》、楽黛雲、李比雄主編：《跨文化対話（文化をまたぐ対話）》第13輯、上海文化出版社2002年版、第7頁。

⁵⁰ 原注：[美]戴斯・賈丁斯：《環境倫理学－環境哲学導論（環境倫理学－環境哲学序論）》、林官明、楊愛民訳、北京大学出版社2002年版、第96頁。

この点において、我々は曖昧な態度や似て非なる態度をとるべきではない。事実上、環境観念はまさしく生態危機を造り出す思想根源の一つであって、もしこの観念を排除できなければ、生態重視の文明を生態重視の思想基礎の上に打ち立てることは不可能だし、思想と文化の深層から生態危機の問題を本当に解決することもできないのである。

何が“生態的”で何が“環境的”なのかを明快にできず、また何が“生態的”で何が“環境的”なのか区別できなければ、別に一般に存在する術語の濫用という問題を導くことも起こる。それはつまり“生態”という言葉の一般的使用である。“生態”の語が人気を集め、ブームの言葉となってしまっ、多くの人文社会領域で濫用される状況になっている。多くの人文社会学者が“生態”の語の辞典上の意義を借用して、ある領域の内部の状態、その体系性及び関係性を表そうとして、“精神生態”“文化生態”“文学生態”“言語生態”“政治生態”“社会生態”“教育生態”などたくさんの新術語を創作し今でも限りなく膨張し続けているけれども、この新しい術語の被修飾語となる“生態”の語の厳格な定義は無視されている。そこでは“生態”の語に含まれる主要な意味が生態思想を指すこと、またその外延のさす主要な領域が人類と自然の生態系との関係の検討にあるという明確な指摘はないし、またこの新しい術語を伝統的で既に存在し多くの人から認められている術語と区別しようともしていない。精神生態研究というものはその字面から見れば、人類の精神状態、規律、内部関係を研究しようという学問に見える。だとすれば、この研究は哲学研究、心理学研究とどんな違いがあるというのか。同じ理屈で、文化生態研究と文化学とは、文学生態研究と文学理論とは、言語生態研究と言語学とは、政治生態研究と政治学とは、社会生態研究と社会学とは、教育生態研究と教育学とは、いったいどのような違いがあるのか。もし、“精神生態研究”が検討するのは、人間の自然に対する認識、精神と自然との関係、精神状態と生態危機との関係だというのなら、明らかにこの術語は不正確であって、“精神と生態との関係の研究”というか、“生態の視角からの精神研究”というべきなのだ。なぜならば、このような学際的な研究が注目することになるのは主に連携であるからだ、つまり生態思想の角度から精神現象と精神状態が自然或いは生態系と呼ばれるものともつ相関性や相互作用を検討するのであって、一つの精神世界自体を検討するものでは決してないからである。

2. 生態文学の定義

“環境文学”のほかに、“生態文学”ではなく“ネイチャーライティング”⁵¹(Nature

Writing) の語を使用したがる学者もいる。米国の多くの作品集や専門研究書はこの術語を使う。例えば、影響の大きな『ノートン・ネイチャーライティング文選』及びアイホダ大学教授スコット・スロヴィック、中フロリダ大学教授のパトリック・モーフェイ等の一連の著作がそうだ。しかしながら、多くの中国人学者と多くのヨーロッパの学者はこの術語を認めていないし、米国の学者の中にも賛同しない者がいる。例えば、チャールス・ロック教授は“ネイチャーライティング”の語の使用を拒絶して、彼が2001年秋からスタンフォード大学で始めた課程には“米国生態文学”(American Ecoliterature)と名付けている。“ネイチャーライティング”という術語には重大な欠点があるからだ。

まず、“ネイチャーライティング”という術語は、描くべき対象の領域が余りに狭すぎる。生態文学はただ単に自然を描く文学ではない。生態文学は自然を描く伝統的な文学とは根本的に異なるのである。即ち、そこで主に研究され明らかにされるのは、自然と人との関係なのだ。つまり、自然が人へ与える影響、人の自然界での位置、自然万物と人との関連、人の自然に対する破壊、人と自然の融合などだ。自然描写はあっても、それは主にこれらの関係を明らかにするのが目的なのである。しかも、生態文学は人と自然との緊張、疎外、対立、衝突という関係の深層の根源、それは即ち人類が自然を征服し略奪するという思想・文化・経済・科学技術・生活方式・社会発展モデルを造り出した社会的な根源を探し出すことにとりわけ重点を置く。作品の中には自然景物を全く描かないものであっても、人類の自然破壊を導いた社会的原因を鋭くえぐり出したがゆえに、優れた生態文学作品と称されるものもあるのだ。

次に、“ネイチャーライティング”という術語は思想上及びジャンル上領域の及ぶ範囲が広すぎる。作者が自然に対してどんな観点や態度を持つのかは問題にならず、自然を描いていれば、その作品はネイチャーライティングと見なされ、非生態であろうが反生態であろうがそこに含まれてしまう。例えば、『ノートン・ネイチャーライティング文選』に選ばれた作品の中には生態意識のないものも含まれている。“ネイチャーライティング”の語を使ってしまうと、生態文学を一般の自然描写の文学と区別できなくなり、生態文学の最も際立った特徴と主な使命を明示できないのだ。このほかに、“ネイチャーライティング”には非文学の文篇も含まれてしまう。多くのネイチャーライティ

⁵¹ ネイチャーライティング：原文は「自然書写」。

ングの文章総集では、かなりの量の哲学・自然史・政治学・宗教学・文化批評などの著述が収録されており、その結果文学研究の範囲を大きくはみ出すことになった。正にこのため、“ネイチャーライティング”は文学なのだろうか、“ネイチャーライティング”に対する研究は文学研究なのだろうか、と問う人も現れる。従って、著名な生態批評家のモーフィーは“自然文学”或いは“自然に向かう文学”の語を、“ネイチャーライティング”に換えて用い、かつ両者の差異を細やかに分析している⁵²。これにより、“ネイチャーライティング”という術語は、生態文学全体を覆えるものではないし、また多くの非生態文学創作や非文学の文章を生態文学と一緒にたにして論じてしまうものであることが分かる。

最後に、現在の国際学会における人文社会科学学科と生態学との学際的研究の命名を見れば、多くが“生態+某学科”⁵³または“生態的+某学科”の形式、例えば“生態哲学”“生態倫理学”“生態政治学”“生態経済学”“生態神学”“生態人類学”“生態社会学”“生態マルクス主義”“生態フェミニズム”等を採用している。従って、“生態文学”の語を使うことは、現代生態思潮の各分派と一体的で調和の取れた関係を形成することになる。

こうなると、“生態文学”という術語の使用の主張、及び“生態文学”の語に検討を加えるという主張は、決して文字遊戯ではないし、決して概念のために概念を作り上げるものではないと言って良い。実際、他の術語では生態文学の独特の価値を示すことはできないからこそ、この文学の領域に名前を造り出さねばならないのだ。

この術語の内容を定義する前に、まず生態文学の主要な特徴がどのようなものか見ておこう。生態文学の主要な特徴は以下の五点である。

まず、生態文学は生態全体主義を指導思想とし、生態系の全体的な利益を最高価値とする文学であって、人間中心主義を理論的基礎とし人類の利益を価値判断の最終基準とする文学ではない。

生態文学は生態系主義或いは生態全体観によって自然と人間との関係を考察しようとするもので、それが人類のあらゆる自然と関係する思想、態度及び行動に対して行う評価基準とは、生態系の全体にとっての利益、つまり生態系が調和をもち、安定して、平

⁵² 原注：Patrick D. Murphy, *Farther Afield in the Study of Nature-Oriented Literature*, Charlottesville, VA: University Press of Virginia, 2000, p.11.

衡をとりながら持続的に存在するために有利かどうかにある。人類を自然界の中心とはせず、人類の利益を価値判断の最終基準にしないことは、決して生態文学が人類を蔑視したり人類に背こうとするものではない。その真逆で、生態の災難から起こる被害や、生態の危機という現実が、生態文学者に教えたのは、生態系全体の利益を根本的な前提と最高価値にしてこそ、人類は本当に有効に生態の危機を消すことができるのであり、およそ生態系の全体的な利益になるものは、最終的には人類の長期的な利益或いは根本的な利益にすべて必ず利がある、ということだった。人は自然の一部であり、人は永遠に自然から離脱はできないのだから、自然全体が存続しなければ、人類の安全、健康、長期にわたる生存などは確保できないのである。この特徴こそ生態文学を決める最も基本的な判断であり、またある作品が生態文学かどうかを決める核心的な標準なのである。

第二に、生態文学は自然と人間との関係を考察しそして表現する文学である。生態への責任を生態文学の顕著な特徴とする。

生態文学の自然と人との関係への考察及び表現に主に含まれるのは、自然の人間への影響(物質的及び精神的)、人類の自然界での地位、自然界全体及び自然万物と人類との関係、人の自然に対する征服・制御・改造・略奪及び残虐行為、人の自然保護や生態の平衡の回復や再建、人の自然賛美や審美、自然との調和への人類の立ち返りと再建等である。自然と人との関係を表現するとき、生態文学は人の自然に対する責任と義務をとりわけ重視し、自然万物の保護と生態の平衡の維持を切実に訴え、生態系の利益のために払われる自己犠牲を情熱的に賛美するのである。

第三に、生態文学は生態危機の社会根源を探る文学である。文化批判が多くの生態文学作品の突出する特徴である。

生態文学が表現するのは自然と人との関係であるけれども、人類の思想、文化、経済、科学技術、生活方式、社会発展モデルの上に帰結していく。この特徴について、多くの学者や作家は同様な視点を持っている。ビュエルは、生態文学は必ずや“人類の歴史と自然史との密接な関係を明らかにする”ものだと強調し⁵⁴、ベイトは、生態文学及びそ

⁵³ 生態+某学科：日本ではこのような場合「環境……」と記されることが多そうだ。「環境倫理学」「環境人類学」など。この翻訳では敢えてそのまま「生態」の語を使って訳している。理由は前書きに記した通り。

⁵⁴ 原注：Lawrence Buell, *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*, Harvard University Press, 1995, Cambridge, p.7.

の研究は生態の災難を導いた社会的原因を探求し、人類の文明が“いったいどこで道を誤ったのか”を探し出すべきだと主張する⁵⁵。もう一人の生態学者ジョナサン・レヴィンも、“我々の社会文化のあらゆる面では、我々がこの世界に生存するための唯一無二の方法が決められている。これらを研究することなしには、人と自然環境の関係を深く認識する手立てはなく、ただ皮相的な憂慮を表せるに過ぎない……従って、我々は必ずやさらに多くの精力を費やして、人類が自然を扱う態度及び自然環境の中で生存しようとする行為を決定している全ての社会文化要素を分析し、さらにこの分析と文学研究を結びつけ……文化がどのように地球の生態に影響を及ぼしたかを歴史的に示さねばならない”と指摘する⁵⁶。米国の著名な現代生態学者アイダホ・エイブもまた、生態学者は“ソローのように、単純な自然文学の範疇を超えて、社会、国家及び我々の現代工業文化を評論する作家であるべき”で、盲目的な進歩や発展への批判者となるべきだと指摘する⁵⁷。ブランチ、スロヴィック等は、彼らの主編になる『大地を読む：文学と環境研究の新しい方向』の前書きの中で、“フェミニズム批評とアフリカ系アメリカ人文学批評が文化の改変を訴えたのと同様に……生態批評も文化の変革を提唱する、それは我々の文化が自然界に対する各種の狭隘な仮説によっていかに生態的な、持続可能な人類社会を創造する我々の能力を制限してきたかを考察し……文化の再検討と再構築の過程にあって、生態文学の研究と分析は高らかな声を発しようとしている”と述べている⁵⁸。

生態への災害を造り出した社会的根源を探り出し明らかにすること、それが生態文学に顕著な文化批判の特徴を持たせることになる。人間中心主義、二元論、自然征服統治観、欲望動力観、発展至上論、物質主義、消費主義などの思想概念、生態の平衡を崩す環境改造、自然資源を取り尽くし奪い取る経済発展、自然の規律に違反し自然の進化に干渉する科学技術の創造、地球を厳しく汚染する工業化と農業の現代化、大規模な殺傷武器の開発と使用など各種各様の思想、文化、社会現象に対して、多くの作家が激しい批判を与えている。正にこの特徴のために、ある具体的な作品が生態文学に属すのかど

⁵⁵ 原注：Jonathan Bate, *The Song of the Earth*, Harvard University press, 2000, Cambridge, p.24.

⁵⁶ 原注：Jonathan Levin, *On Ecocriticism (A Letter)*, *PMLA* 114.5 (Oct.1999) : p.1098.

⁵⁷ 原注：程虹：『尋婦荒野（荒野へ帰れ）』、三聯書店 2001 年度版、第 223 頁。

⁵⁸ 原注：Branch, Johnson, Patterson and Slovic (ed.), *Reading the Earth ; New Directions in the Study of Literature and Environment*, Moscow, Idaho : University of Idaho Press, 1998, p.xiii.

うか判断すべき時、自然を直接描くことがその必要条件になる必要はないことになる。

第四に、生態文学は人類が万物と調和を保って共存するという理想を描き、地球と人類の未来を予想することに熱心な文学である。生態の理想と生態への警告は多くの生態文学作品の突出した特徴なのだ。

多くの生態文学作品は作者がもつ人と自然が調和して共存する理想を伝えている。作家たちは、原始的な生活状態を切望したり、インディアンが自然万物と一体になることにあこがれたり、自ら進んで自然山水の中に隠れ住む。自然への回帰、これが生態文学の永遠の主題であり夢なのである。生態文学者は、人類が今日まで発展してしまい、既に中世の時代ましてや原始時代同様の生活状態に回帰不能な状況にあることは既に了解済みである。しかしながら、彼らはそれでも彼らの理想を描き出すことに固執しようとする。なぜならば、そうしなければ、現在の発展段階にあって、自然との共生はいかにすれば最大限度行うことができるのかを人々に考えさせ続けることができないからだ。ハイドが『大地の歌』の中で、生態詩の目的が理想とする自然の生活状態を眼前に繰り広げ、我々に“想像された自然状態、想像された理想の生態系を提供する。それを読み、その世界に陶醉することによって、我々に現在とは異なった方法で大地に暮らすやり方を想像し始めることができるのだ”⁵⁹と指摘している。例えば、物質生活を最大限度の簡略さにすること及び精神生活を最大限度の豊かさにとすること、それが多くの生態作家が描こうとする理想の生活方式であり、ルソーからソーヤさらに他の当代生態文学者まで、このような生活方式の追求が現在の段階でできることでありまた自然に回帰するための必要な前提だと考えている。

とりわけ生態文学の想像性を強調するのはビュエルで、彼の初めての生態文学の専門研究書は“環境の想像”という表題であった。ビュエルのいう想像とは、生態文学が美しい理想を描写することを指すばかりではなく、そこには未来の生態災害への予想や警告をもまた含まれる。事実上、19世紀のメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』からアトウッド『オリックスとクレイク』まで、生態文学者は未来の生態災害及び人類の壊滅を予測したり想像した反ユートピア作品を大量に造り出してきた。これらの作品は次々に人類に警告を発している。その警告とは、人類はまさしくその最大の限界

⁵⁹ 原注：Jonathan Bate, *The Song of the Earth*, Cambridge MA : Harvard University Press, 2000, Cambridge, pp.250 - 251.

に向かって一步一步近づいているのであり、もし現在の生活様式と生産方式を続けていけば、生態系の末日は遠くない状態であるということだ。生態思想家のウォスター、生態批評家のビュエルはこのような生態への警告性を持つ文学を“生態黙示録文学”（the literature of ecological apocalypse）と呼ぶ。ビュエルは、“黙示録というのは当代の環境想像の最も有力な核心的隠喩である”とわざわざ指摘する⁶⁰。

第五に、生態文学は独特の生態美学を押し進め表現しようとする文学である。自然性の原則、全体性の原則及び融合性の原則が、生態文学が生態美学を押し進める主要な原則である。

生態文学は思想の面でそれ自身の特性があるばかりでなく、さらに審美と芸術表現の面でも独特で、その他の文学とは違った標準がある。このような独特の審美と芸術標準を造り出す主な原因は、生態文学が生態全体主義をその指導思想とするからである。生態文学者が審美対象を生態系の中におき、自然全体の中において考察するとき、彼らが驚きを以て発見するのは、以前美しいと思っていた多くのものが美しくないばかりではなく実に醜悪なものであり、そもそも醜悪に思っていたたくさんの事物が感動させるほどの生態の美を持っていたのであるということ、これまでの自然描写は人を対象化するに終わり、自然本体の美を示すものではなかったということだ。視野の拡大と参照対象の改変は、生態文学の作家に自然を征服しようとする観点、人類中心論、主客二元論、欲望動力論、発展唯一主義、科学技術至上主義、消費文化などの思想概念に対する新たな考察や新たな評価を導いただけではない、美と美の研究及び芸術表現に対しても新たな思考と新たな研究を導いたのである。その生態美学への研究をまとめると、三つの主要な生態美学の原則を得られる。生態美学の目的からいって、その第一の原則は自然性の原則であり、審美の対象領域からいって、その第二の原則は全体性の原則であり、審美の方法からいって、その第三の原則は融合性の原則である（詳しくは第四節を参照）。

以上を要するに、我々は“生態文学”に以下の定義を与えても良いだろう。

生態文学とは生態全体主義を思想の基礎として、生態系の全体的な利益を最高価値

⁶⁰ 原注：Donald Worster, *Nature's Economy: A History of Ecological Ideas*, Second Edition, Cambridge: Cambridge University Press, 1994. p.23; Lawrence Buell, *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*, Cambridge MA: Harvard University Press, 1995, p.285.

とし、自然と人間の関係を考察して表現するもの、生態危機の社会的な根源を攻撃するもの、そして独特の生態美学を展開して表現する文学である。生態への責任、文化への批判、生態の理想、生態への警告及び生態の美学がその際だった特徴である。

20世紀60年代に生態文学が誕生して以来、世界の文壇には多くの傑出した生態作家と生態作品が出現してきた。上にあげた特徴はこれらの典範性を持つ生態文学の理論的分析でありまたその概括である。しかし、現在の段階では、専門的にかつ終始変わらず生態文学作品を産みだし続ける作家の数にはやはり限界があるし、先掲の全ての特徴や上述の定義に厳格な意味で適合する生態文学作品もまた限られたものだ。従って、具体的にある作家やある作品を検討する時には、生態文学の第一の特徴、即ち本当に“生態的”であって“環境的”さらには“人間中心主義”ではないのなら、また生態全体の価値をその最終的な価値とするものとなっていさえすれば、基本的に生態作家や生態作品と見なしでも良い。ある作品、特に生態思潮が生じる以前の作品や多くの環境文学の作品については、全体的に見れば生態文学作品とは見なされないけれども、生態思想や生態美学の輝きを放つ部分も含んでいて、生態文学として考察可能な領域に属するものである。このような考察の領域はそのまま原始時代の文学まで延長することができよう。このほかに、多くの典範的な生態作家・作品が20世紀60年代以降に生まれたとはいえ、それはそれ以前に厳格な意味での生態文学者や生態文学作品がなかったということの意味するものではない。原始文明時代の作品多くの神話伝説及び詩歌・散文、ロマン主義時代のある作家たちの作品(例えばルソー、ワーズワス、及び『森の生活』『フランケンシュタイン』)等は優秀な生態作家であり作品だと称え得るからだ。

特に指摘しておかねばならないのは、人間中心主義、二元論を創作指導思想とする環境文学が、生態文学と似た或いは同様な訴えを起こすことがあることだ。例えば自然保護を主張したり、自然との調和ある共存を主張したり、人類の自然に対する略奪や破壊を制限するべく主張したりもする、しかも多くの環境文学の作品の中には、厳格な意味での環境主義と矛盾するものもある。従って、かなり長い間、環境文学にはやはりその積極的な意義や現実的な価値があったのである。生態文学は自己の主張と特色を堅持するという前提の上で、環境文学を排斥はせず、逆に環境文学と、時には非生態文学とも多角的な共存を主張する。生態文学が唱導するのは全体内部の多角的な共生であり、決

して一元的独占ではなく、また二元的対立でもないのである。

生態文学は文学の創作と文学研究に新しい視角を提供し、新しい領域を開拓し、新しく発展する契機を創造し、新しい発展の動力を取り入れ、その姿からして全体的に全く新しい理念といえるもの、つまり生態哲学の理念、生態美学の理念及び文芸学の理念をもたらし、さらに文学にそれが担当すべき自然の使命と文化変革の使命を与えたのである。とはいえ、生態文学はその他の文学思潮、文学流派及び文学創作の方法自体にその価値があることを否定はしないし否定できるものでもない。生態文学者や生態批評家は、人類の文学は全体的に見ればやはり人間の学であり、人間中心主義の指導の下の文学であることはすでに了解済みである。このような文学は数千年の発展と堆積を経ており、主に人間を重視し、人類社会を重視し、主に人の価値と人の利益の角度から問題を考えてきた。それは十分な理由と必然性があることだ。もちろん、それだけでは全く不十分であり、自然を離れては人と社会を全面的に知ることはできないものだけれども。数千年にわたる人類中心の文学創造の思想的価値や芸術的価値は極めて大きく、極めて重要で、深く研究し高く評価するべきものだ。たとえその価値が生態とは無関係であってもである。生態文学は決してその他の文学に取って代わろうとするものではないしできるものでもない。しかも、その局限性もまた明確に意識していて、その領域を厳格に自然と人との関係の範囲内に限定する。生態文学はより多くの人々—文学関係者及び非文学関係者—に、以下のことを証明したいばかりなのである。それはつまり、生態の問題は現在極めて重要な問題であって、地球全体及び全ての生物の存亡に関わるほど重要なのであり、文学者はこの問題に対して声を上げることができるとまた上げるべきであり、また生態危機を緩和して取り除くようにするために貢献することができるとまたすべきなのだということである。